

シーボルトと増田繁亭金太

「草木奇品家雅見」とその著者増田金太(増田繁亭金太郎)

シーボルトと繁亭金太の関わりは定かではないが、シーボルトの江戸参府が文政9年(1826年)、シーボルト事件により日本を去ったのが文政12年(1829年)、国外退去の禁が解けて2度目の来日により長崎に着いたのが安政6年(1859年)、幕府の要請を受けて再び江戸の地を踏んだのが文久元年(1861年)である。

この間、増田繁亭金太は、文政10年(1827年)冬に「草木奇品家雅見」を刊行し、文久2年(1862年)に70歳で没している。生まれはシーボルトより4年早い。

シーボルトは、1835年から1870年の長い年月を費やして「日本植物誌」を刊行した(その間、1866年に没している。)

今日、「日本植物誌」の「本文覚書編」が大場秀章[監修・解説]／瀬倉正克[訳]で八坂書房から発行(2008年)されている。

「日本植物誌《本文覚書編》」には、シーボルトが「スギ(杉)」を記した一節があり、1865年に原文が書かれたことが知れる。

シーボルトは、スギの樹生の大きさと冬季の植生の新鮮な緑、さらに木材としての有用性に触れ、1825年にはスギ(杉)をヨーロッパへ移植させるべく決意を示し、1827年と1830年には育苗地ジャワを経由してオランダのライデンへ移入させている(この時点では、結局失敗に終わっている。)

シーボルトは終生、スギをヨーロッパに移入し、ヨーロッパに杉林の誕生することを夢見ていたが、その情熱はシーボルトの著作を経て、後のプラントハンターによって達成されている。

さて、「日本植物誌《本文覚書編》」における「草木奇品家雅見」であるが、シーボルトはこの奇書を手元において「スギ」を執筆しており、高木としてのスギの対極として、矮小化した11センチあまりの「とても優雅な小木」としてのスギを「草木奇品家雅見」から紹介している。

シーボルトは、日本の園芸の発達にことさら興味を示し、「立花」という仏花から始まった日本の園芸を理解し、ヨーロッパと異なる「庭」という小さな世界に矮小化された植物や斑入りの草木、八重咲の花が育種されていることを示し、江戸時代の太平の世から「地上でもっとも豊穡で美しい植物相に無数の変種植物が作り出され、園芸の汲めども尽きぬ源泉が」ヨーロッパにもたらされるであろうことを示している。

江戸時代、特に幕末の混沌とした世情にあつて、シーボルト以後に来日した数々のプラントハンターによって豊かな日本の植物相と斑入りを始めとした奇樹奇草がヨーロッパにもたらされ、彼地の今日の園芸の発展を促がしているのである。

シーボルトは、「江戸くずし字」で板刻刊行された「草木奇品家雅見」を自ら読み砕くことはできなかった。シーボルトは残念ながら日本語を十分に会得することができなかったのである。

シーボルトがドイツで書いた「スギ」の記述は、日本の地での見聞によっている。

恐らく「草木奇品家雅見」への理解も、庭や鉢植えによる実地見聞と、江戸や長崎におけるまな弟子の日本の本草学者からの音読によって得たものであろう。

筆者が興味を持つのは、スギの斑入りについて記された部分である。

「黄斑スギ」、「白斑スギ」、「黄金(ウコン)スギ」を正確に区別するシーボルト。

シーボルトの斑入りに対する興味と愛情は、140年を経た今日でも大いなる共感を与えてくれる。

シーボルト先生、あなたは増田繁亭金太にお会いになられましたか。

(増田 信敬 2008. 6. 16)

(引用文献=架蔵本)

- ・ 「シーボルト 日本植物誌《本文覚書編》」

大場秀章 [監修・解説] / 瀬倉正克 [訳] 2008年八坂書房

(参考文献=架蔵本)

- ・ 「江戸参府紀行-ジーボルト著-」 斎藤 信訳 1967年 平凡社東洋文庫87

Copyright (C)2008 増田信敬 (masuda nobutaka) All rights reserved

<http://soumokukihinkagami.com/>